

令和7年度

自己点検・評価書
(学校評価報告書)

附属平野小学校

1 附属平野小学校の現況

(1) 学校名

大阪教育大学附属平野小学校

(2) 所在地

大阪府大阪市平野区流町1-6-41

(3) 学級数・収容定員

18学級(1学年3学級) 収容定員630人(1学級35人)

(4) 幼児・児童・生徒数

619人(男子 310人・女子 309人)

(5) 教職員数

校長(併任) 1人, 副校長 1人, 主幹教諭 1人, 指導教諭 1人, 教諭 25人(うち, 栄養教諭1人, 任期付教諭4人, 育児休業1人, 在外1人), 非常勤講師6人, スクール・カウンセラー 1人, スクールサポーター 1人

事務職員 2人(非常勤2人), 事務補佐員1人, 常勤用務員(調理師)1人, 臨時用務員(用務員)2人, 臨時用務員(調理師)4人

2 附属平野小学校の特徴

本校の特徴は、自分自身が社会の一員としての自覚をもち、より良い未来を思い描き、その実現に向けて能動的にアプローチし続けることができる資質・能力を備えた子どもを育成することにある。

そのために、「確かな学力」を培うとともに、自他を尊重し、多様さを認め合い、自他の生命を尊ぶ「豊かな人間性」を育むことが必要であり、教職員・保護者・地域の連携によってその育成を実現していく学校である。

3 附属平野小学校の役割

- ① 義務教育学校として、児童の心身の発達に応じた初等教育を実践する。
- ② 教育実習の実施校として、教育実習の指導にあたる。
- ③ 教育研究の推進を図るため、大阪教育大学と密接な関係を保ちつつ、実証的な研究を行う。また、教育の成果を発表し、わが国の教育の発展に寄与することに努める。
- ④ 国の「拠点校」、地域の教育の「モデル校」として寄与する。

4 附属平野小学校の学校教育目標

「ひとりで考え ひとと考え 最後までやりぬく子」

- 「ひとりで考え」…知的好奇心に基づく主体性

興味・関心をもって対象に関わり、自らの経験や各教科の学びを活かしながら、より良く対象に働きか

けることのできる子どもの姿。

- 「ひとと考え」…支え合う協調性

他者の視点で物事を考えたり共感したりして、互いを尊重し合い、他者に積極的に関わり、より良い関係を築こうとすることができる子どもの姿。

- 「最後までやりぬく」…自己調整しながら自己実現に向かう創造性

自分なりの課題を見出し、その課題解決のために計画を立てたり、過程を工夫したりする子どもの姿。

自身の活動を振り返り、自分なりの新たな意味や価値を見出すことができる子どもの姿。

5 附属平野小学校の学校教育計画

- 1, 一人一人を大切に学習の中で、確かな学力を育成する。

私たちは、「楽しく、充実感のある」授業や教育活動を通して、一人一人の子どもたちの良さや可能性を伸ばしていくことを学校教育の最大の目標としている。そこでは、私たちは、知識や技能を一方的に身につけさせることのみで埋没するのではなく、子ども一人一人を見据え、個性化された学習の中で、一人一人に確かな学力を育成する。

そのために、私たちは、指導理念や指導技術の共有化に努め、一人一人の子どもに応じた指導を進めていく。また、子どもと子ども、子どもと教職員の信頼関係に裏打ちされた「学びの共同体」づくりに尽力していく。

- 2, 人との関わりの中で、基本的な生活習慣や公共心を身につけさせる。

この数年間、掃除や給食指導をはじめ生活指導上の問題まで「当たり前のことをきちんとする」子どもを育てようという取り組みを進めてきた。この間様々な実証的研究により、生活習慣・規範意識と学力の間に高い相関関係があることが明らかになった。

そこで、今後も、「確かな学力と豊かな心」を身につけた子どもの育成をめざして、基本的な生活習慣や公共心をしっかりと身につけ、生活面でも真に自立した子どもを育てていく。そして、人との関わりの中で、自分自身を評価し、他者の評価を真摯に受け止め、よりよい自己を創り上げていこうとする子どもを育てていく。

- 3, 保護者や幼稚園・中学校・高等学校・特別支援学校並びに地域・大学との連携を深める。

私たちのめざす教育は、小学校の教職員のみで実現できるものではない。よりよい教育は、学校と家庭、地域、他校園、大学とのよりよい関係の中でつくられる。

そこで、本年度も本校の教育活動の成果や課題、改善の方向などを広く発信することで、理解を深め、積極的で建設的な協力関係を築き上げていく。また、保護者や地域、幼稚園、中学校、高等学校、特別支援学校、大学との連携を中心に、一人一人の健やかな成長を支えるという視点から「確かな学力と豊かな心」を育成できる理論と実践を明らかにし、様々な地域の教育実践に貢献できるようにする。

6 附属平野小学校の令和5年度 重点目標(評価項目), 具体的な取組内容(評価指標)・評価結果

評価の基準

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標	「ひとりで考え ひとと考え 最後までやりぬく子」
学校教育計画	1, 確かな学力の育成に資するバランスのよい教育課程を編成し, 実施するための研究活動の最適化 (①教育課程・学習指導, ⑦組織運営, ⑧研修, ⑩施設・設備) ・研究開発指定校として, 研究主題「未来の社会を創り出す子どもを育てる概念ベースの探究カリキュラム開発」を追究する中で, 新教科「未来探究科」を軸とする教育課程を編成する。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 確かな学力の育成に資するバランスのよい教育課程を編成し, 実施する (①教育課程・学習指導)	ア. 未来の社会を創り出す子どもの育成及びそのような子どもを育てる概念ベースの探究カリキュラムの開発に向けて, 学校教育活動全体において新教科「未来探究科」を核としたカリキュラム編成を行う。	これまでの研究成果を活かし, 昨年度より研究開発学校として, 新教科「未来探究科」を核として, 概念ベースのカリキュラム開発を行った。実社会・実生活で生かされる力を育成する「概念」ベースのカリキュラムマネジメントを行うとともに各教科の学習内容の統合・横断してカリキュラム編成することにより, 少ない時数で豊かに学ぶことを目指した。カリキュラム編成においての各教科の学びと探究的な学びの関係性を「概念」と「方略」の視点から明確にすることができた。	個の学びを丁寧に見取っていくことと, より学校や地域の実態に応じたカリキュラムを開発していく。加えて, カリキュラム開発についての汎用性のあるモデルを作成し, 地域の学校へ発信していくことで附属学校としての意義を果たしたい。	B	保護者アンケートより「未来探究科」はこれからの社会を生きるために必要が力を培っている」という項目では96%の方から「そう思う」との回答があった。記述アンケートでは各教科の基礎的な学力の獲得に不安を感じるものも見られた。	B	研究に関わる職員の共通理解を深めるとともに, 来年度も引き続き, 探究的な学習のより良い在り方を模索し, カリキュラムの検討・改善を続けていく。また, 未来探究科についての保護者説明会も継続して学期に1回実施し, 理解を得られるようにする。
	イ. 新たに編成した教育課程について授業を語る会や指定授業, 研究発表会などで発信し外部評価を得て見直す機会を設定する。	春・秋の指定授業を実施し, 研究協力員や共同研究者にご来校いただき, 助言を受け, 改善を図るだけでなく, 多様な指導助言の先生方より, ご指導をいただくことができた。2月の研究発表会では, 広い地域から多くの先生方に来校いただき, 多く	研究授業だけでなく, 日々, 教員がお互いの授業を気軽に見にいき, 授業について語り合える場	A	研究会後のアンケートより「次期学習指導要領との関連が分かりやすかった」「自分の学校にも取り	A	来年度も, 概念と方略をキーワードとしながらカリキュラムを改善し研究を見直していくと共に, 定期的に

		のご意見をいただくことができた。今後の研究にいかしていきたいと思います。	を増やす。		入れていきたい」との回答があった。		外部評価を得られる機会を設定し、研究を続けていく。
(2) 確かな学力の育成に資するバランスのよい教育課程に基づく授業づくりの視点と方法を教員間で共有する。(⑧研修)	ア. 校内研究授業を定期的実施し、教員間で同じ子どもの姿を見ながら、本校においてめざす子ども像、研究において追究するカリキュラムの在り方について語り合い、教職員間で共有できるようにする。	定期的研究授業を行うことで、それぞれの教員が年2回は授業公開が行えるようにした。その中で、新たに目指す資質・能力や「概念」をベースとした未来探究科のカリキュラムについて見直しをかけた。今年度の副題にもなっている教科との関連を明確にするための「概念」「方略」の捉え方を共通理解するために何度も研究会議を実施した。	校内研究授業後のみでなく、その後の研究の進め方、研修の在り方までを視野に入れて、教員一人ひとりが参加して良かったと思える研究計画を立てる。	B	指導助言の先生方より新学習指導要領を見通した全国的な研究内容になっているという評価をいただいた。	A	来年度も、早い時期に校内研究授業を行い、同じ子どもの姿を見て語り合える機会を設定することで、研究について共通理解を図り、進めていきたい。
	イ. <「JSプロジェクト」の実施> 地域貢献のため、公立小学校の研究を年間継続してサポートする。研究授業に向けての打ち合わせ、指導助言等に教員を派遣し、地域の学校の研究を支えると共に、その学びを校内にも還元できるようにする。	「地域貢献推進委員会」において、本年度は、2校で実施した。校内からは、依頼がある度に、毎回2名体制で教員を派遣することで、一人で抱えるのではなく、他校の研究推進支援について共に話し合いながら進められる環境をつくった。未来探究科の探究学習について公立校でも実施していただくことで本校にとっても研究内容の汎用性についてのエビデンスを取ることができた。また、教育活動、研究活動について視察も多く受け入れ、本校の取組を発信することができた。	次年度について、既に視察依頼を受けている学校もある。本校の取組をより分かりやすく伝え、地域に還元してもらえるように努めていく。	A	支援校の先生方より「継続して指導していただけることは非常にありがたい。次年度も引き続きお世話になれたらと思うている。」という評価をいただいた。	A	未来探究科の中でも地域とのつながりが深まっている。HP・研究会等での情報発信の充実をはかりたい。
(3) 確かな学力の育成に資するバランスのよい教育課程を編成できるように組織運営の最適化を図る。(⑦組織運営)	ア. 校務分掌の再編を図り、マンパワーではなく、組織として、それぞれの課題解決を進められるようにする。	全員研究部員として、膨大な業務を適正に配分することができた。それぞれが当事者意識をもって研究に取り組むことができた部分もあるが、メンバーの入れ替わり等の理由で、見通しが持てなかった部会もあり、業務内容によっては一部の教員に偏る部分も見られた。部会の意義をそれぞれが自覚して、自律的に運営していける組織をめざす。	部会の長とその部会の存在意義を確認しながら、何ができるかを自己決定するミドルアップダウンな組織をめざすことで、それぞれが機能的に運営していくようにする。	B	指導助言の先生方より「一部の教員だけで研究が進むことがないように、全員がより高い意識をもって、学び続けることが必要ではないか」という意見をいただいた。	B	次年度についても、各部会の長が研究戦略会議に入ることで、健全な意見集約がなされ、自分の考えも研究に生かされるという感覚を一人ひとりが持てる形にしたい。
(4) 確かな学力の育成に資するバランスのよい教育課程の実施のための施設・設備の最適化を図る。(⑩施設・設備)	ア. ICT教育環境の整備のために、児童用タブレット、指導者用タブレットの整備を図ると同時に、オンラインにて授業や行事を実施するための校内環境整備を行う。	GIGAスクール構想に伴って、一人一台割り当て、使用を開始している。iPadの学年を増やし、スキルの定着を図ってきた。各教科の授業の中で、子ども自身は使いこなしている。また、2年生以上の学年では「学びポケット」というアプリを宿題に活用し、反復学習のフォローができ、かつ、教員の働き方改革につながるよう実施した。	次年度から全学年においてiPadで一人一台設定できる予定である。より学校としてのICT環境の定着をめざす。	B	「情報モラルについて、学校での指導が見えにくい」という評価についても対応していくため、情報モラル教育を徹底していく。	B	情報モラル教育の重要性を強く感じる。系統性のある情報モラル教育の構築が必要である。全学年iPad導入が円滑に進むように準備をする。

学校教育目標	「ひとりで考え ひとと考え 最後までやりぬく子」						
学校教育計画	2, 登下校指導, および, 人間関係づくりなどの教育活動の最適化を図る。(②生徒指導, ③進路指導, ④安全管理, ⑤保健管理) 共同的な活動を通して得られる, 感動や達成感を感じられるような教育活動の場の設定を工夫していくためにも, クラス間, 学年間の意見交流を日常的に行えるようにする。						
本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 学校生活上の ルール, マナー, 健康 安全を, 教職員と 児童で共通理解し, その徹底を図る。(④ 安全管理・⑤保健管 理)	①全校朝会や学年朝会, 通学班指導, 各学級 での指導, 外部組織との連携を通して, 登下 校中の安全に関する児童の意識を高める。	放送やオンラインでの朝会も活用しながら, 基 本的には運動場で集まる形で実施できた。定期 的に通学班指導を行うことができたものの, 特 定の電車やバスの通学マナーでの課題が残っ た。	月1回の通学班指導を実 施するとともに, 何か問 題が起こった場合, 当日 あるいは翌日に複数の教 員で解決を図るように努 める。	B	立哨アンケートより 「一部児童の下校の態 度がよくない。注意し ても聞かない。」という 声があった。	B	子どもたちの安心・安全に繋がる通 学班指導を, 短い時間でもいいので 月1回実施する。その中で, 低学年 の指導も徹底できるようにしてい く。
	②健康安全の視点で, 子どもの安全を守るこ とができるよう, 教職員で, エピペン研修の 緊急対応訓練を企画・実施し, その上で, 日々 の子どもたちの安全を守る意識を高める。	現在在籍している児童の緊急対応マニュアル を実際に活用し, 教職員で, 万が一の時の対応 として, エピペン使用の緊急対応訓練を実施し た。その後振り返りをもとに, マニュアルを見 直し, 普段から気を付けるべきことについても 教職員で話し合うことができた。アレルギー対 応にも丁寧に対応できた。	避難訓練の実施や未来探 究科の喫食に関わる学習 内についても安全について 配慮できた。事前の保護 者への周知をもっと早く する。	B	未来探究科の学習に関 わるアンケートや参画 案をもっと早く教えて ほしいという意見があ る。健康安全の面にお いても重要であるた め, 改善していく。	B	来年度も同じ形の研修を実施し, 教 職員全体で, 改善案を考えていくよ うにする。
(2) 人間関係づく りに向けて, 自他の 尊重や学び合いの精 神の向上に取り組 む。(②生徒指導・③ 進路指導)	①子ども・保護者とのコミュニケーションを 大切に, 子ども一人ひとりへの細やかな配 慮と, 保護者との密な相談・連絡を行う。	電話でこまめに保護者に連絡をとることを教 員全体に呼びかけ, 密に連絡をとるよう意識し て行動した。また学年・学校全体で, 子どもた ちの様子をこまめに共有し, 対応できるように 進めた。若手教員へのサポートも学年主任を中 心として実施し, 漏れの無いようにしたい。	今後も継続しておこな っていく。若手教員に対 しての支援体制を確立し, 保護者へ丁寧な連絡をし て連携が図れるようにし ていく。	A	アンケートでは, 96% が「学校から家庭への 連絡は適切である」と 回答しているが, 一部 の保護者からはもっと丁寧な 連絡が欲しいと意見 をいただいている。	A	怪我をした時や, 問題が起きた時の 対応をフローチャートでマニュアル 化し, 共通理解に努める。どの教 職員においても丁寧な対応ができ るようにする。
	②外部人材を活用し, 「本物」に出会い, 子 どもたち自身が, 自らの興味・関心を広げたり, 新たな視点で自己や他者を捉えたりと, 多面的・多角的に自らの生き方について考 え, 学びを深められる機会を設定する。	「未来探究科」の授業において, 外部人材を活 用することで, 内容だけでなく, それぞれの学 年が様々な方の生き方にふれることができた。	今後も継続して実施して いく。	A	ゲストティーチャーの 方たちから「自分たち にとっても大きな学び があった」という声を いただいた。	A	来年度も, 未来探究科や各教科の学 びに応じて, ゲストティーチャーな どの外部人材を活用し, 子どもが学 びを得られるように支えていく。

学校教育目標	「ひとりで考え ひとと考え 最後までやりぬく子」
学校教育計画	3, PTA活動, および, 平野地域との連携の最適化を図る。(⑨保護者, 地域住民との連携)

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) PTA活動・ サークル活動と教 育活動の連携の 新たな可能性を探 る。(⑨保護者)	①PTA役員の方々を中心 として, 学校側とPTAの 方々の連携をより強固なも のにするとともに, PTA活 動のスリム化を図り, よりよ いPTA活動の在り方を検 討する。	縦割り委員活動については, 昨年度にスリム化できた分, 定期的 に活動を実施することができた。さらに, 年2回, 学校全体 の保護者に呼びかけて, 学校の安全のための清掃活動を実施す ることができた。サークル活動においては, 子どもに返る形を 検討し, サークル内での提案をもとに, 実施した。 学年委員会の活動について, 特に大きな活動がないため, 今後, 縦割り委員会との役割分担が必要になってくると思われる。	一部の人に負担がか たよらないような体 制を引き続き検討す る。	B	常時の縦割り委 員会だけでなく, 土曜の有志の清 掃活動が実施で きたため, 学校の 様子も分かり, 児 童にとっても良 い環境が作れた 意見があった。	A	今後も, 持続可能な業務の整 理をしながら, 出来る範囲で の活動を実施していく。特に 一部の人が負担に感じるこ とのないような仕事配分を再検 討する。
(2) PTAと平野 地域保護者との共 同的な活動に取り 組む, (⑨地域住民 等との連携)	①. PTA 保護者や平野五校 園, 平野警察や区役所などの 地域と連携し, 子どもの安 心・安全な学校生活を支える ために, 防災・防犯を強化す る。	・五校園避難訓練や普段の登下校, 不審者対応に関して平野警 察と連携し, 避難訓練等を行うことができた。 ・校内の不審者対応訓練についても平野警察の協力のもと行い, 避難の体制, 校内の設備の見直しを図ることができ, 子ども たちや教職員の防犯への意識も高めることができた。	今後も各種機関と連 携して, 教職員だけ なく児童の防災意 識を高める活動を行 いたい。また, SPS 学校 として認定されたの で, 取組の発信もして いく。	B	警察署や消防署 の方からも「継続 して連携するこ とで, 安全面でも 地域のモデル校 となってほしい」 とのことであっ た。	A	来年度も, 地域の自治体と連 携し, 子どもたちの安心・安 全のために必要なことを, 学 校内でも見直し, 継続してい く。